

新潮文庫

欲しがりません勝つまでは

田辺聖子 著



新潮社

ほ 欲しがりません勝^かつまでは
私の終戦まで

新潮文庫

草 175 = 8



昭和五十六年七月二十五日 発行
昭和五十七年六月十日 四刷

著 者 田^た 辺^{なべ} 聖^{せい} 子^こ

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六―五一
電話 編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替 東京四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

錦 印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

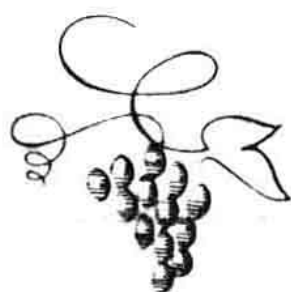
© Seiko Tanabe 1981 Printed in Japan

ISBN4-10-117508-X C0193

新 潮 文 庫

欲しがりません
勝つまでは

田 辺 聖 子 著



新 潮 社 版

2746

目次

欲しがりません勝つまでは……………	七
『少女草』とわたし……………	一五
人生二十五年……………	一四七
トミちゃん……………	一九三
生けるしるしあり……………	二三五
あとがき……………	二五三

解説 宮本輝

欲しがりません勝つまでは

欲しがりません勝つまでは



女学校3年

はじめての小説

私は十三歳、女学校二年生である。

天皇陛下と祖国・日本のために、命をすてるのだと、かたく決心している。そうして、ジャンヌ・ダルクにあこがれている。

昭和十六年である。

日本は戦争のまっ只なかにあつた。

そういえば、私が生まれてから、日本は、ずーっと戦争のしつづけであつた。戦争をしていない祖国を、私は知らないわけである。

満洲事変^{まんしゅう}からひきつづき、小学校四年生のときに、中日戦争^{ちゅうにち}がはじまつていた。

戦争はひろがる一方で、いつおわるともわからない。

いや、世界じゅうが、いまや戦争の嵐につつまれていた。ヨーロッパでは、イギリスやアメリカ・ソ連を相手に、ドイツがたたかっていた。無敵のドイツ軍はノルウェー、オランダ、ベルギーを下し、ポーランドを破り、フランスを降伏させ、ソ連になだれを打って侵入しつづつあつた。

日本はドイツと同盟をむすんでいたから、友邦ドイツのかがやかしい勝利に、夢中で喝采^{かつさい}をおこつた。

ナチスのヒットラーユーゲントの少年少女に負けないように、私たちも祖国につくすのだ！
私はそう思って、はりきっている。ジャンヌ・ダルクのように、軍の先頭にたって、旗をひるがえし、さっそうと進むのだ！

すこし、のぼせやすい私は、あこがれのジャンヌ・ダルクのことを考えると、いつも呼吸がはやくなるくらいに、昂奮こうふんしてしまふ。

女ばかりの軍隊、娘子軍じやうしが結成されるようであれば、まっ先かけて馳はせ参じて加わろうと、決心しているのである。

倫理の時間に、教頭の麻田先生あさだが、

「会津が落城するときは、武士の妻や娘たちまでたち上って、武器をとってたたかったのです。なんといいけだかい、凜冽りんれつたる志でありましょう。皆さんがたも、軍国日本の女性として、そういう決然たる覚悟を養っておかなくてはなりません」と、おっしゃった。

先生はかねてから軍国主義的な話をなさるきびしい先生である。そうして、時によると、雷のおちるような大音声だいおんじやうで、

「静かにせんかーッ！」

とどなられるのである。

そうすると、講堂中にいっぱいあふれている全校の生徒が、水を打ったように、

「しーん」

としてしまふ、おそろしい先生である。眼が据わっており、じろりと、教室の端から端までに
 らまれると、ワルイことはしていないのに、少女たちは、うつむいてしまふ。

そういう先生であるが、先生が、幕末の勤王の志士や、けなげな武士の娘たちの話をされると、
 みんな思わずひき入れられて聞いてしまふ。

かぶとに香をたきしめて戦死した、大坂城夏の陣の勇将、木村重成^{しげなり}。彼の妻は、夫の出陣に際
 し、一足さきに自害して、夫に心のこりをつくらぬようにしたのであった。

古代、夫にしたがって新羅^{しらぎ}に戦争にゆき、敗れてとらわれた日本の將軍の妻、大葉子^{おおばこ}は、「か
 ら国の城^きの上に立ちて大葉子は、ひれ振らすもヤマトへ向きて」と歌って、新羅兵に殺された。
 みな、何という潔い女たちだろう。

幕末の太田垣蓮月^{おおたがきれんげつ}尼や、野村望東尼^{のむらもちに}は、勤王の志士をたすけ、幕府の圧迫にも屈しないでた
 かったのである。先生はたいそう話がお上手なので、私は、すぐのぼせて、国家の危急に際し、
 はやく一身をなげうって働き、天皇陛下のために死にたくなる。

その覚悟は、もうとうに出来ているのであるが、私にはあこがれてることがたくさんある。
 ジャンヌ・ダルクや、会津藩の武士の妻・娘たちだけでは無いのである。

じつをいうと、私は、女学校の上級生の吉田サンにあこがれている。

それからして、女学生のあこがれがいっぱい書いてある、吉屋信子の小説の中の世界にあこが
 れている。

吉屋信子の小説のキチガイといってもよい。

女学生になってからは、私は、『少女の友』を毎月、とってももらっている。小学生のときは『セウガク六年生』だった。

『少女倶楽部』という雑誌もあるが、私は中原淳一の絵が大すきなので、その絵が表紙になっている『少女の友』をとることにしたのである。

弟のノボルは『少年倶楽部』をとってもらっている。

私は『少女の友』に毎月のっている中原淳一の絵の少女にもあこがれている。眼の大きな、手足のほそ長い、夢みるような美少女にあこがれている。

また、山中峯太郎みなたろうのぼうけん小説にもあこがれているのだ。『敵中横断三百里』や『大東の鉄人』や、『亜細亜の曙』アジア あけぼのにもあこがれをもっている。

ゴビ砂漠の彼方かなたへ、祖国の運命を賭けた軍事機密を抱いて消えてゆく、いさましくも雄雄しい、少女スパイになつてゐるような気がして、私はうっとり空想している。

それから、またヒョイト、全く方向のちがうものにあこがれる。それは、トラピスト、修道女である。鈴蘭すずらんの花咲く丘に立つ修道院に、自分もはいったら、どんなだろう。とにかく、あこがれがいっぱいあつて困っちゃう。

淀川よどがわのそばにある女学校で、教室の窓からひろい淀川が見わたせた。川の水は美しく春には川岸の石垣のあおさを近くの人々が採りにきた。これは干してフリカケにしたり、味噌汁のミにしたりするのである。

私たちは、あおさは採らないけれど、自習時間など、こっそりエスケープして、川岸へ下りて、

湖の匂いのする川風を胸いっぱい吸いこむこともある。

淀川の川面^{かわも}には、葦^{あし}がいちめんに茂っていて、夏の風はたいそう涼しい。夏休みちかい頃の、午後の授業などは、うっとり、ねむけをさそわれてしまう。

私は天皇陛下のために、命を捧^{ささ}げて死ぬつもりだけれど、お弁当をたべたあと、ねむたくなってくるのは、これはべつの話である。

そうしてまた放課後、仲よしのグループの友田サンや長井サンや森サンと講堂の裏手の林でだべったり、音楽室のとなりの芝生で、四つ葉のクローバをさがしたりするのも、べつの話である。講堂の裏手は、カシや青桐の木が植わっていて、その幹には、卒業生が彫^うっていた文字がある。それをよむのはおもしろかった。

「夢多き^{まなびや}学舎をいでたつ日に。もと子さま」

「友情」

「純愛」

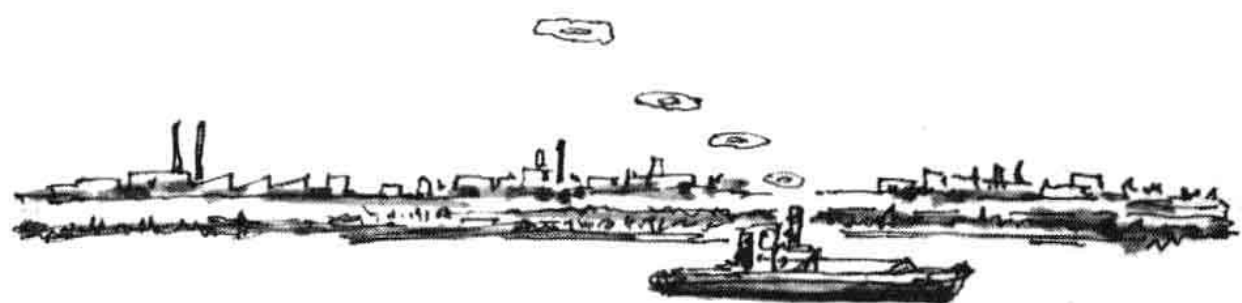
などという言葉もある。私たちは一つみつけると、

「キャア。これ見てみ」

といって、友達をよんで見せ合う。夾竹桃^{きようちくとう}の花が、暑くるしそうにボテボテと咲いていて、その樹のため、このへん、ちょっと別世界のようにかこまれているのだ。

たまに、子供、子供した一年坊主が迷いこんでくると、私たちは上級生風を吹かして、

「授業がすんだら早く帰りなさい」



と追いはらってしまふ。

その代わり、そんな私たちに、上級生の四年生や五年生が、

「何してんの、あんたら」

と咎めることがある。

「お掃除当番でない人は、早う帰んなさい。あんたら、何年生？ 何組？」
なんて、いわれてしまふ。

風紀係りの上級生だから怖いのではなく、上級生というものは、みな怖いのである。昔の学校では、上級生はみな權威があるのだった。

形式的な權威だけでなく、ほんとうに、上級生はオトナだった。女学校の一年生と五年生とでは、全くオトナとコドモほどちがう。

昔の学制では、小学校までが義務教育である。小学校を出て働きにいく子も多かった。

その上は、男子は中学校、女子は高等女学校へ進む。男女共学ではなく、別々になっているが、中等学校はどちらも五年制である。

さらに上級学校へ進学するとなると、男子は高等学校三年、大学三年である。

女子は、専門学校三年までで、大学は女子に開放されていない。女子大学という名称はあるが、学制の区別からいうと、格は専門学校で、戦前は、女子に大学教育は要らないものというのが、タテマエになっている。

女学校は五年までであるので、十二、三歳の一年生から見ると、十七、八歳の五年生は、別世界

の人のようにみえた。

私たちの女学校の制服はセーラー服で、スカートは車ひだのスカート、ネクタイは紺^{こんじゆす}縞縞子をふわりと胸もとへむすぶのだった。(祝祭日の式の日、そのネクタイが白の縞子になる)

もったも、私が入学した年から、綿製品は統制されて、ほんもののサージや、絹の縞子はなくなっていた。それで、ぼてぼてと重たい、化学繊維になっていた。けれど、上級生のお姉さまたちは、昔のものなので、服地がしっかりしていたから、スカートのひだもピツと折り目ただしく、縞子の三角ネクタイも、つやつやとして、張りのあるものだった。五年生は背丈もあり、横幅もたっぷりあり、バストやヒップの堂々として、一年生は圧倒されそうである。戦前の十二、三の子供は、現代とちがって、体格は貧弱だったから、キビガラのように瘦^やせた手足をして、色黒く眼ばかりキョロキョロした、カラスみたいな生徒たちだった。

しかし五年生の上級生たちは体つきも充分成熟した乙女で、髪も長く、まるい頬は健康そうな色に輝き、背もたかい。悠々とあるいて、通りすぎるとクリーム色の匂いがプーンとしたりして、いかにも、

「お姉さま」

という感じだった。

女学校へはいると、入学式の日、校長先生からお話がある。

「上級生はお姉さま、下級生は妹、お姉さまは妹の世話をし、面倒をよくみななければいけません。妹はお姉さまのいいつけをよく、守らなければいけません。姉妹仲よく、というのが、わが校の